日本語教育部

１．　日本語研修コース及び日本語研修特別コース

２．　短期留学プログラム日本語コース

３．　全学向け日本語コース

４．　日本語能力試験対策講座

５．　共通教育科目・日本語日本事情系科目

６．　福井大学博士人材キャリア開発支援センター

１．日本語研修コース及び日本語研修特別コース

《全体概要》

教員研修留学生４名を受け入れた。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語と、研究を行う上で必要な基礎的な日本語の習得である。文型・文法10コマ（１コマ90分）を基本として、漢字、作文、情報処理、文化、修了発表指導の各技能クラスがある。コース最後の修了発表会では、日本語によるスピーチを行う。各受講者の修了発表のテーマは以下の通りである。

１．「ルアンパバンきょうしようせいたんだいについて」　　カムサボン・ビエンタ（ラオス）

２．「ルーマニアの学校せいかつ」　　クリスティナ・フロレスク（ルーマニア）

３．「私の学校～Sta. Maria National High School」

エヴァンジェリン・セモニア（フィリピン）

４．「ミャンマーの教育」　　ソー・ミン・ルイン（ミャンマー）

2013年度の時間割は以下のとおりである。

《時間割表》

	月	火	水	木	金
1	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）
2	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）	日本語 （文型・文法）
3	日本語 （情報処理）		日本語 （漢字）	日本語 （作文）	日本語 （修了発表指導）
4	日本語 （補講）		日本語 （文化）		

以下に各クラスの概要をまとめる。

《日本語（文型・文法）》

【受講者】４名　【授業時間】10コマ／週　総コマ数：136コマ

【担当教員】桑原陽子（コーディネータ）、澤崎幸江、敷田紀子

１）目標

留学生活を送る上で必要な基礎的な日本語を習得する。（『みんなの日本語初級』第１課～25課）

２）方法

（１）授業の進め方

・１限目は、全学日本語コース「日本語Ｉ」と合同で『みんなの日本語初級』に添って学習した。２限は１限の学習項目の定着のための応用練習を行った。原則として２日（４コマ）で１課を終了した。１限の詳細は、全学日本語コース「日本語Ｉ」を参照のこと。

・２限では、３分間日本語で話すtalk-time、ビデオ教材視聴、ロールプレイなどを行った。

（２）成績・評価

復習テスト(15%)と期末テスト(85%)で、最終成績60点以上を合格とする。合格者は、来期全学日本語コース日本語Ⅱを、不合格者は同コース日本語Ⅰを受講する。

３）評価と課題

・全学日本語コースとの合同授業では、活発な練習活動が実施できた。

・２限で多様な学習活動を行うことにより、応用力がついた。しかし、クラス内の到達度に差が大きく、日本語（補講）の時間を利用して補習を行ったが、十分な効果が挙げられなかった。定着が遅い学習者をどのように活動に参加させるかが課題である。　（桑原陽子）

《日本語（情報処理）》

【受講者】４名　【授業時間】１コマ／週　総コマ数：13コマ　【担当教員】桑原陽子

１）目標

Microsoft wordとpower pointの基本的な使い方を学び、修了発表の資料を作成する。

２）方法

情報処理センターの端末を使用し、Microsoft wordとpower pointの使い方を学習した。教材は、担当教員作成のプリントである。修了発表資料を評価対象とした。

３）評価と課題

学習者に基本的ＰＣ操作の知識があり、スムーズに学習が進められた。　（桑原陽子）

《日本語（作文）》

【受講者】４名　【授業時間】１コマ／週　総コマ数：14コマ　【担当教員】桑原陽子

１）教科書および授業の目標

・６つの課題作文のプリントをもとに修了レポートを作成する。

２）方法

（１）授業の進め方

・修了レポート作成のために、６つの課題を設定した。

・課題作文　１．私の国の先生の仕事　２．私の国の先生と学生の一日　３．私の町と私の学校
４．私の学校　５．私の仕事　６．学校の行事

（２）成績・評価

課題作文(50%)＋修了レポート(50%)

３）評価と課題

各国の学校の事情が異なるため、学生どうしが情報交換することで話題が広がり、意味のある語彙の学習が可能になった。作文力に差があり、特に文法の定着が悪い学習者には負担が大きかったが、修了レポートという到達目標のおかげで、動機は維持でき最後まで取り組めた。

（桑原陽子）

《日本語（漢字）》

【受講者】６名（日本語研修コース４名、日本語研修特別コース２名、すべて非漢字圏）

【授業時間】１コマ／週　総コマ数：12コマ　【担当教員】山中和樹

１）目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅰ　漢字　英語版』を使用して、漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット１～９の102漢字、156漢字語を習得する。

２）方法

（１）授業の進め方

・原則として１コマ１ユニットで進んだ。ただし、最初の２コマで漢字の識別、成り立ち、ベーシックストロークについて学習した。３コマ目から10～14字ずつ漢字を学習した。

・授業では、漢字の成り立ちから説明し、テキストの漢字の読み・書き練習を行ったが、画数の多い漢字はもっぱら読みの練習を行った。

（２）復習クイズ

・毎回、漢字フラッシュカードを使用し、学習済みの漢字の読みを繰り返し復習した。その直後に、各ユニットの復習クイズを実施した。主に文中における漢字語の読みをひらがなで書く問題を出題したが、数に関する漢字や画数の少ない漢字の書き問題も出題した。

（３）成績・評価

・毎回のクイズ(20%)＋期末テスト(80%)をもとに総合的に評価した。

３）評価と課題

・今期は日本語研修コースの学生４名のほかに、日本語研修特別コースの学生も２名参加した。すべて非漢字圏であったが、いずれも漢字に興味を持ち、積極的に漢字学習に取り組んでいた。毎回のクイズでは、やや定着のよくない学生もいたものの、期末試験では全員、優秀な成績をあげた。

（山中和樹）

《日本語（文化）》

【受講者】４名　【授業時間】１コマ／週　全13コマ

【担当教員】膽吹覚（コーディネータ）、摩騰富子（華道）、柳原智子（陶芸）

１）目標

華道、陶芸について、福井県在住の指導者から直接に指導を受けて体験学習することによって、日本の伝統文化に対する理解を深める。

２）授業内容

（１）華道（池坊）：９コマ

『池坊自由花入門カリキュラム』を参照しながら自由花に取り組んだ。

（２）陶芸（越前焼）：４コマ

第１回と第２回は陶芸の道具の使い方など、陶芸の基礎を学んだ上で、中皿と湯飲み茶碗を制作した。第３回と第４回は花器とランプの制作に取り組んだ。

（３）最終製作発表

修了発表会会場に自作の花器を持ち込み、それに各自が自由花を生けることで、この授業の成果を総合的に発表した。

３）評価と課題

成績は出席状況と各講師からのご意見を総合してコーディネーターが判定した。受講生はおおむね意欲的に取り組んでいたようである。なお、懸案の茶道については受講生のニーズもあるので、学内の茶道を中心に、今後の検討課題としたい。（膽吹覚）

《コース全体についての課題》

非常にいい雰囲気で学習が進み、コースを終了することができた。２限でさまざまな活動を取り入れることで応用力を伸ばすことを試み、手応えが得られたので、次回は活動の整備を行いたい。（桑原陽子）

日本語研修特別コース

研究留学生３名を受け入れた。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語と、研究を行う上で必要な基礎的な日本語の習得である。文型・文法10コマ（１コマ90分）が用意されている。３名中２名が本人の希望により日本語研修コースの漢字クラスを受講した。授業の詳細については、日本語研修コースの「日本語（文型・文法)」と「日本語（漢字)」を参照のこと。

本コースは、学生の希望により指導教員の許可を得て受講するコースであり、１週間に10コマすべて出席できることを受講条件としている。しかし、研究活動の都合で、10コマ中９コマしか出席できない、あるいは学期途中で数週間の欠席を希望するなど、１週間に10コマすべて出席することが難しい局面があった。本コースの受入の条件について再検討が必要である。

（桑原陽子）

２．短期留学プログラム日本語コース

《概要》

このコースは、福井大学と交流協定を締結している大学等から受け入れている短期留学プログラムＡコースの学生が共通科目として受講する日本語コースで、日本語・日本事情系科目10単位、伝統産業系科目２単位が必修である。

2013年前期は、2012年度に受け入れた留学生18名が日本語科目（「日本語初中級１」「日本語初中級２」「日本語中級」「日本語上級」、「はじめての作文」「はじめての会話」）および日本事情科目（「日本の文化」「応用日本語２」）を受講した。

2013年後期は、2013年度に受け入れた留学生17名が日本語科目（「日本語初級１」「日本語初級２」「日本語初中級」「日本語中級」）、日本事情系科目（「応用日本語１」、「伝統産業１」及び「多文化コミュニケーション１」）を受講した。

① 2013年前期

《科目一覧》

科目	教　　員	教　　科　　書	受講者
日本語初中級１	山中和樹、市村葉子 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	9
日本語初中級２	桑原陽子、市村葉子 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	4
日本語中級（日本語Ａ）	桑原陽子	『大学で学ぶための日本語ライティング』	4
日本語中級（日本語Ｃ）	山中和樹	プリント	4
日本語上級（日本語Ｅ）	膽吹覚	『日本文化を読む』	1
日本語上級（日本語Ｇ）	桑原陽子		0
はじめての漢字	桑原陽子	『みんなの日本語初級Ⅰ漢字　英語版』	1
はじめての作文	山中和樹	『みんなの日本語初級やさしい作文』	2
はじめての会話	山中和樹	『みんなの日本語初級Ⅱ』	5
日本事情２	膽吹覚		0
日本の文化	膽吹覚		1
応用日本語２	山中和樹	プリント	2
多文化コミュニケーション２	小幡浩司		0
伝統産業2	中島清		0

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
１限		日本事情２		日本の文化	
				多文化コミュニケーション２	
２限	日本語初中級１	日本語初中級１	日本語初中級１	日本語初中級１	
	応用日本語２				
３限	はじめての漢字		はじめての作文	はじめての会話	
		日本語中級（A）			
		日本語上級（E）			
４限	日本語初中級２	日本語初中級２	日本語初中級２	日本語初中級２	
		日本語中級（C）			
		日本語上級（G）			

《受講者数》

国名／科目	中国	インドネシア	アメリカ合衆国	台湾	合計
日本語初中級１	5	1	1	2	9
日本語初中級２	4	0	0	0	4
日本語中級（日本語Ａ／日本語Ｃ）	4	0	0	0	4
日本語上級（日本語Ｅ／日本語Ｇ）	0	0	1	0	1
はじめての漢字	0	1	0	0	1
はじめての作文	0	0	0	2	2
はじめての会話	4	0	1	0	5
日本事情２	0	0	0	0	0
日本の文化	0	0	1	0	1
応用日本語２	1	0	1	0	2
多文化コミュニケーション２	0	0	0	0	0

国名 科目	中国	インドネシア	アメリカ合衆国	台湾	合計
多文化コミュニケーション３	0	0	0	0	0
伝統産業２	0	0	0	0	0
小　　計	18	2	5	4	29

《授業報告》

１．日本語初中級１

・受講者：９名（中国５名、台湾２名、インドネシア１名、米国１名）

・授業時間：４コマ/週　総コマ数：60コマ

・担当教員：＊山中和樹、市村葉子、村上洋子（＊コーディネーター）

１）教科書及び授業の目標

・『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）

『みんなの日本語初級Ⅱ文法解説』（同上）

・初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習する。

・日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

２）方法

（１）授業方法

２コマで1課のペースで進めた。授業は文型の導入と定着を中心とした。具体的には語彙を導入した後で、練習Ａ・Ｂ・Ｃを行った。理解の困難な文型については『書いて覚える文型練習帳』を用いて、その理解と定着を図った。会話はこのクラスではしなかったが、毎回１人ずつ３分間スピーチを担当させて、発話能力の向上を図った。宿題は教科書の課ごとに問題の部分を課した。

（２）小テスト

Ｌ26-30、31-35、36-40、41-45の計４回実施した。

（３）成績および評価

期末試験(80%)、小テスト(20%)の配分で判断した。

３）評価と課題

・期末試験の結果を見る限り、受講生全員が当初の授業目標を到達したといえるだろう。

・今期のクラスも活発で、自発的な発話もあった。

・授業冒頭のスピーチでは、パワーポイントを利用した発表をする学生もいた。

・非漢字圏の学生が２名いたが、このクラスは読解の授業ではなく、また、教材にも振り仮名がついていたので、特に漢字がハンディになることはなかったと思われる。　（山中和樹）

２．日本語初中級２

・受講生：４名（中国４名）

・授業時間：４コマ／週　総コマ数：60コマ

・担当教員：＊桑原陽子、村上洋子、市村葉子（＊コーディネーター）

１）目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』25課～50課を終了。初級の基本的な文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

２）方法

（１）教科書『みんなの日本語初級』の取り扱い

・２日で１課終了。「書いて覚える文型練習帳」等の補助教材も積極的に使用した。

（２）教科書以外の活動：

・毎日、その日にくじでテーマを決めてそれについて自由に話す「おしゃべりタイム」を設けた。毎回学生１人が会話のまとめ役として話題を提供し、自由会話を行った。

（３）成績評価

・文法復習テスト（筆記）３回(15％分)＋修了テスト(26～48課)（85％分）

３）評価

・全員授業態度は非常に良好であった。

・「おしゃべりタイム」の時間が話す力を伸ばすのに非常に有効で、全員話す力が伸びた。

（桑原陽子）

３．日本語中級（日本語Ａ）

・受講生：４名（中国４名）

・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・担当教員：桑原陽子

１）教科書及び授業の目標

・教科書：佐々木瑞枝・細井和代・藤尾喜代子著「中・上級者用日本語テキスト　大学で学ぶための日本語ライティング」The Japan Times

・レポートの書き方を学ぶ

２）方法

（１）授業方法

教科書に沿って、レポート執筆に必要な表現や文型を学ぶ。ほぼ毎回、練習問題やレポート執筆（２回）の課題を出した。

（２）成績及び評価

課題レポート(60点)と提出物・授業態度(40点)を総合的に評価した。

３）評価と課題

授業態度は非常に良好で、全員が課題レポートにまじめに取り組んだ。ただし、初級文法が定

着していないところがあり、毎回の課題でかなりの時間を割いて指導が必要であった。

（桑原陽子）

４．日本語中級（日本語Ｃ）

・受講者：４名（中国４名）

・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・担当教員：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・教科書：プリントを配布

・擬音語・擬態語や助詞の使い分けなどに関するテーマの文章を読んで初級のまとめをし、それらを実際の作文で使用できるようにする。

２）方法

（１）授業方法

・この授業は共通教育科目「日本語Ｃ」との合同授業である。平均すると、大体２～３コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。

（２）復習クイズ

中間試験として１回、実施した。

（３）成績及び評価

成績評価は規定の出席率（２／３以上）を満たすことを前提として、その上で中間試験と期末試験の結果をもとに判断した。内訳は次のとおり。中間試験（50%）、期末試験（50%）

３）評価と課題

この授業は共通教育科目「日本語Ｃ」との合同授業であるが、短プロの受講生は全員、漢字圏の出身であり、読解はあまり問題がなかったようである。短プロ生以外に非漢字圏の学生も混在していたので、漢字の読みと意味のプリントを全員に配布した。出席については、全員皆勤であった。また、授業態度もまじめであり、成績も良好であった。（山中和樹）

５．日本語上級（日本語Ｅ）

・受講者：１名（アメリカ１名）

・授業時間：１コマ/週　総コマ数：15コマ

・担当教員：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・『中上級者向け日本語教材　日本文化を読む』（アルク）

・日本語で書かれた著名な小説・エッセイ・評論を読み、それを理解する能力を養う。

２）方法

（１）授業方法

・１課につき1コマのペースで行なった。教科書の設問に沿って進め、最後に作品全体について

の理解を図った。

（２）成績および評価

・期末試験（100%）

３）評価と課題

・受講生にはやや難しい教科書であった。しかし、本クラスの他の受講生の日本語能力を考慮すると、止む得ないことでもあった。今後は本コース生が中級レベルの日本語クラスを再履修できるなどの方策を検討すべきかもしれない。（膽吹覚）

６．日本語上級１（日本語Ｇ）

本科目の受講者なし。

７．はじめての漢字

・受講生：１名（インドネシア１名）

・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・担当教員：桑原陽子

１）目標

基本的な漢字の読み方、書き方を学ぶ。

２）方法

（１）教科書『みんなの日本語初級　漢字英語版』

・１日で１課終了。１課から15課まで終了。

（２）成績評価

・復習クイズ２回(20%×２)＋修了テスト(60%)

３）評価

・授業態度は非常に良好で、当初の予定よりも５課分多く進んだ。

・自律的に学習できるように、授業中もiPadのアプリ等を活用し、楽しく学習できた。

（桑原陽子）

８．はじめての作文

・受講者：２名（台湾２名）

・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・担当教員：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・教科書：『みんなの日本語初級　やさしい作文』

「は」と「が」、「テ形と連用中止」に関するプリント

・初級の語彙や文法を使って、さまざまなテーマで作文する。

２）方法

（1）授業方法

・まず、モデル文を読み、内容を把握し、随時、文法・語彙について説明する。次に作文のポイントに進み、練習問題をする。最後に、作文する。授業時間内にできないときは宿題とし、次回に提出させる。

・下書きしたものをチェックし、添削したうえで、清書させる。

・自分の作文を読み、他のメンバーに紹介し、その内容について、質疑応答する。

・原則として、１コマ１ユニットで進んだが、最初のユニットは易しいので１コマ２ユニットで進んだ。各課はモデル文の内容解説、教科書の練習問題、「作文メモ」、「書きましょう」（実際の作文）からなっている。

・「は」と「が」の使い分けと、「テ形」を使った接続の理解が不十分だったので、適宜、プリント教材を使用した。

（2）成績評価

・課題作文提出状況と出席状況・授業態度より総合的に評価した。

3）評価と課題

・出席、授業態度とも大変良好であった。　（山中和樹）

9．はじめての会話

・受講者：５名（中国４名、米国１名）

・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・担当教員：山中和樹

1）教科書及び授業の目標

・教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』

・指導教員との会話、学外での会話において、自分、趣味、専門などについて話せるように表現や語彙を習得する。

2）方法

（1）授業方法

教科書の各課の会話のビデオをまず見て、内容を理解する。次に教科書を見て内容を確認する。次に、各課で扱われている文法項目を含む文を、教科書を見ないで、言えるようにする。それから、その課の教授項目の表現を使用して、指導教員や他の学生と自由な会話の練習をする。最後に、ビデオを見て、ビデオの内容について教師が質問し、学生がそれに答える練習をする。

初めに『みんなの日本語初級Ⅰ』を復習した。初級の初めの方は１日に４～５課扱った。学習が進むにつれて１日３～４課のペースになった。

3）評価と課題

・出席状況・授業態度及び期末試験（個別の会話試験）より総合的に評価した。出席、授業態度とも良好であった。出席率はほぼ100％。　（山中和樹）

10. 日本事情２

本科目の受講者なし。

11. 日本の文化

・受講者：１名（アメリカ１名）
・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・担当教員：膽吹覚
１）教科書及び授業の目標
・『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』（アルク）
・日本にホームステイした留学生の目を通して、日本の季節感や、日本人家庭の様相、日本人の考え方について学んだ。
２）方法
（１）授業方法
・１課につき１コマのペースで行なった。教科書の設問に沿って進めた
（２）成績および評価
・期末試験（100%）
３）評価と課題
・受講生はおおむね授業を理解できたようである。また、積極的に発話し、受講生間での議論も盛んであった。（膽吹覚）

12. 応用日本語２

・受講者：２名（中国１名、アメリカ１名）
・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・担当教員：山中和樹
１）教科書及び授業の目標
・日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント
　日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向上を図る。
２）方法
（１）授業方法
　導入として、新聞記事の黙読を行い、大意を把握させた。次に、教師が音読した。それから、学生に１文ずつ、順番に音読させた。その後、新しい文法事項や発音の問題点などを解説し、本文の内容質問等を行った。各回１つの記事を読み切り、次回にその内容に対する試験（記述試験）を実施した。
（２）小テスト
　各項目終了後、実施。全７回。

答案は実施の次週に採点返却し、模範解答を配布した。

（３）中間テスト

電話応対試験（筆記）、記述式）実施。

（４）成績及び評価

期末試験（40%）、中間テスト（40%）、小テスト（20%）。

３）評価と課題

・共通教育科目「応用日本語Ⅰ」との合同クラスであり、受講者全25名中2名が短プロ生である。短プロ生のうち１名は上級レベルで、他の１名は中級レベルであるが、日本語能力試験Ｎ－１レベルの中国からの特別聴講学生と比べると読解力にハンディがあったようだ。

・従来からの課題である、電話応対や名刺交換の実地練習もしたが、今回も全体の人数が多かったので、一人あたりの練習時間をあまりとることができず、細かい指導ができなかった。

・今回は、従来使用してきた記事の代わりに、日本の企業における座席決定の方法についての記事を使用したが、学生の出身国との違いが見えて、好評であった。

・短プロ生２名は授業態度もよかったが、１名は出席状況が芳しくなく、規定の出席率をやっとクリアしたにとどまった。（山中和樹）

13. 多文化コミュニケーション２

前期開講予定だったが、授業担当者の着任が遅れ、夏季集中講義になった。

本科目の受講者なし。

14. 伝統産業２

本科目の受講者なし。

② 2013年後期

《科目一覧》

科目	教　　員	教　　科　　書	受講者
日本語初級１	山中和樹、市村葉子 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	4
日本語初級２	山中和樹、市村葉子 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	5
日本語初中級	膽吹覚、村上洋子 市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	6
日本語中級（日本語Ｂ）	山中和樹	プリント	3
日本語中級（日本語Ｄ）	膽吹覚	『マンガで学ぶ日本語会話術』	3
日本語上級（日本語Ｆ）	桑原陽子		0

科目	教　　員	教　　科　　書	受講者
日本語上級（日本語H）	山中和樹		0
日本事情１	膽吹覚	『留学生のための時代を読み解く上級日本語』	3
応用日本語１	山中和樹	プリント	3
多文化コミュニケーション１	小幡浩司		0
伝統産業１	中島清	なし	18

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
１限	応用日本語１			多文化コミュニケーション１	
	日本語初級２	日本語初級２	日本語初級２	日本語初級２	
２限	日本語初級１	日本語初級１	日本語初級１	日本語初級１	
		日本事情１			
３限	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	伝統産業１
		日本語中級（B）			
		日本語上級（F）			
４限		日本語中級（D）			
		日本語上級（H）			

《受講者数》

国名／科目	中国	台湾	インドネシア	韓国	合計
日本語初級１	1	0	2	1	4
日本語初級２	5	0	0	0	5
日本語初中級	6	0	0	0	6
日本語中級（日本語Ｂ／日本語D）	1	1	1	0	3
日本語上級（日本語Ｆ／日本語H）	0	0	0	0	0

国名 科目	中国	台湾	インドネシア	韓国	合計
日本事情１	1	1	1	0	3
応用日本語１	0	2	1	0	3
多文化コミュニケーション１	0	0	0	0	0
伝統産業１	12	2	3	1	18
小　　計	26	4	2	5	37

《授業報告》

１．日本語初級１

・受講者：４名（中国１名、韓国１名、インドネシア２名）

・授業時間：４コマ／週　総コマ数：57コマ

・担当教員：＊山中和樹、村上洋子、市村葉子（＊コーディネーター）

１）教科書及び授業の目標

・テキスト『みんなの日本語初級Ｉ』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。

・ひらがな・カタカナの導入と定着

２）方法

（１）授業方法

・１課を２コマで行った。

・テキストの問題をほぼ毎回、宿題にして文法及び語彙の定着を図った。

（２）復習テスト：３回実施（６～７課ごとに１回）

（３）ひらがな・カタカナの導入

・ひらがなとカタカナはおおむね学習済みだったが、最初の11コマでそれぞれの清音・濁音・拗音・長音・促音・撥音、カタカナ特殊音の指導を行った。

（４）ディクテーション

・今期は期末試験の前に１週間、集中的に行った。

（５）評価

・復習テスト３回(20%)＋期末テスト(80%)の結果をもとに総合的に判断した。

３）評価と課題

（１）文型・語彙導入

・今回のこのクラスは文字学習にハンディがあったものの、総じてまじめだった。理解にやや時間がかかる場合もあったが、最終的には満足できる成果があった。

（２）文字習得

・４名全員が未習であった。授業開始前のひらがなテスト（清音43文字）では、43点満点で、満点の学生が２名いた半面、10点しか取れていない学生もいた。カタカナテスト（清音43文字）では、満点に近い学生が2名いたが、残る2名は3～4点だった。しかしながら、文字学習が遅れていた学生でも、最終テストのときは、他の学生とほとんど差はなくなっていた。

（３）学生の出席率と成績

・４名中３名は、ほとんど毎回出席した。１名は体調不良や精神面での問題もあり、欠席が多かったが、受験資格である３分の２以上の出席は確保した。

・欠席や遅刻が例年に比べて、やや多かったが、授業態度はよく、積極的であった。成績も1名が良のほかは、優だった。

・今期は、教科書が改訂されたが、ディクテーション用の絵教材が旧版のままだったので、ディクテーションは実施しなかった。期末試験にはディクテーションを課すことにしたので、最後の1週でディクテーションの練習をした。しかしながら、あまり満足のいかない結果に終わった。来期からは、また１課ごとにディクテーションの練習をすることにしたい。

（４）アンケート調査

・４名中３名は授業には「非常に満足」で、１名は「少し満足」との回答だった。（山中和樹）

２．日本語初級２

・受講者：５名（中国５名）

・授業時間：４コマ／週　総コマ数：57コマ

・担当教員：＊山中和樹、村上洋子、市村葉子（＊コーディネーター）

１）教科書及び授業の目標

・テキスト『みんなの日本語初級Ｉ』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。

・ひらがな・カタカナの導入と定着

２）方法

（１）授業方法

・１課を２コマで行った。

・テキストの問題をほぼ毎回、宿題にして文法及び語彙の定着を図った。

（２）復習テスト：３回実施（６～７課ごとに１回）

（３）ひらがな・カタカナの導入

・ひらがなとカタカナはおおむね学習済みだったので、特にまとまった指導は行わなかったが、カタカナ語は随時、指導を行った。

（４）ディクテーション

・今期は期末試験の前に１週間、集中的に行った。

（５）評価

・復習テスト３回(20%)＋期末テスト(80%)の結果をもとに総合的に判断した。

３）評価と課題

（１）文型・語彙導入

・今回は学生が総じて優秀で、理解力も応用力も十分あった。

（２）文字習得

・５名全員が既習であった。授業開始前のひらがなテスト（清音43文字）では、43点満点で、満点の学生が３名、42点の学生が２名だった。カタカナテスト（清音43文字）では、満点及びそれに近い学生が３名で、残る２名は31～32点だった。しかしながら、カタカナ学習がやや遅れていた学生でも、最終テストのときは、他の学生とほとんど差はなくなっていた。

（３）学生の出席率と成績

・５名中４名は、ほとんど毎回出席した。１名は欠席が多かったが、受験資格である３分の２以上の出席は確保した。この学生は本来なら、進度のやや遅い初級１の学生だったが、時間割の関係で、コース開始後数週間で、初級２のクラスに回ってきた。当初、このクラスの授業に追いつくのに苦労したようである。

・総じて、授業態度はよく、積極的であった。成績も、１名が良のほかは、優または秀だった。

・今期は、教科書が改訂されたが、ディクテーション用の絵教材が旧版のままだったので、ディクテーションは実施しなかった。期末試験にはディクテーションを課すことにしたので、最後の１週でディクテーションの練習をした。しかしながら、あまり満足のいかない結果に終わった。来期からは、また１課ごとにディクテーションの練習をすることにしたい。

（４）アンケート調査

・５名中４名は授業には「非常に満足」で、１名は「少し満足」との回答だった。（山中和樹）

３．日本語初中級

・受講者：６名（中国６名）

・授業時間：４コマ／週　総コマ数：56コマ

・担当教員：＊膽吹覚、市村葉子、村上洋子

１）教科書及び授業の目標

・『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）

『みんなの日本語初級Ⅱ文法解説』（同上）

・初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習する。

・日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

２）方法

（１）授業方法

第26課から第49課まで導入した。２コマで１課のペースで進めた。授業は文型の導入と定着を中心とした。具体的には語彙を導入した後で、練習Ａ・Ｂ・Ｃを行った。理解の困難な文型については『書いて覚える文型練習帳』を用いて、その理解と定着を図った。会話はこのクラスではしなかったが、毎回１人ずつ１分間スピーチを担当させて、会話能力の向上を図った。

宿題は教科書の課ごとに問題の部分を課した。

（２）小テスト

第26～30課、第31～35課、第36～40課、第41～48課の計４回実施した。

（３）成績および評価

期末試験（80%）、小テスト（20%）の配分で判断した。

３）評価と課題

今期の受講生は授業態度が良好で、かつ小テスト・期末試験の結果も優秀であった。中国人ばかりのクラスであったが、授業に中国語で私語を話す学生もいなかった。惜しむらくは中国人ばかりであったために、クラス内での異文化交流が図れなかったことが挙げられるであろうが、総体的に見て円滑かつ適切な授業ができたと考えている。（膽吹覚）

４．日本語中級１（日本語Ｂ）

・受講者：３名（中国１名、台湾１名、インドネシア１名）

・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ

・担当教員：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・教科書：プリントを配布

・「テ形」と連用中止の使い分け、「は」と「が」の使い分け、「のである」文の用法などを学習し、それらを実際の作文で使用できるようにする。

２）方法

（１）授業方法

この科目は共通教育科目「日本語Ｂ」との合同授業である。授業は、大体、２～３コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。

（２）復習クイズ

中間試験として1回、実施した。

（３）成績及び評価

成績評価は規定の出席率（２／３以上）を満たすことを前提として、その上で中間試験と期末試験の結果をもとに判断した。内訳は次のとおり。中間試験（40%）、期末試験（60%）。

３）評価と課題

短プロ生は出席・授業態度とも良好だった。非漢字圏の学生を主な対象として、受講者全員に漢字の読みのプリントを別途配布した。プリント教材は雑誌に掲載された記事を使用した。

・短期プログラムの非漢字圏の学生の日本語能力（漢字能力も含む）は高く、漢字圏の学生と一緒でもほとんどハンディを感じなかった。（山中和樹）

５．日本語中級（日本語Ｄ）

・受講者：３名（インドネシア１名、中国１名、台湾１名）

・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・担当教員：膽吹覚
１）教科書及び授業の目標
・『マンガで学ぶ日本語会話術』（アルク）
・日本語中級レベルの留学生を対象として、日本語の会話力の向上を図る。
２）方法
（３）授業方法
第１～36課（全50課）まで行なった。教科書に従って、「マンガ」（ＣＤ）―解説―「練習」の順に進めた。
（２）成績および評価
中間試験（50％）・期末試験（50％）
３）評価と課題
受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、２回の定期試験の結果を見る限り、当初の授業目標は達成できたと判断してよいであろう。テキストも親しみやすく、受講生からの質疑も活発であった。（膽吹覚）

６．日本語上級（日本語Ｆ／日本語Ｈ）

本科目の受講者なし。

７．日本事情１

・受講者：３名（インドネシア１名、中国１名、台湾１名）
・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・担当教員：膽吹覚
１）教科書及び授業の目標
・『留学生のための時代を読み解く上級日本語』（スリーエーネットワーク）
・日本語中上級レベルの留学生を対象として、現代日本社会が抱える諸問題について書かれた文章を読解し、それについて日本語で議論を深める。
２）方法
（４）授業方法
東日本大震災に関する記事を読んで、それについて各自がスピーチし、チームに分かれて　ディベートを行ない、最後にそれについての所見を日本語で書かせた。
（２）成績および評価
スピーチ・ディベート（50％）・レポート（50％）
３）評価と課題
受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、スピーチ・ディベートともに活発に行なわれた。東日本大震災から3年が経過した時期に、このテーマで行なうことの意義も懸念されたが、受

講生の関心は教員の予想を上回るものであった。ただ、原子力発電所の将来に関するディベートでは、短期留学プログラム生の日本語能力が追いつかない場面が散見された。これはテーマの専門性とそれに伴う語彙の欠如によるところが大きかったと考えられる。共通教育科目で履修する学生（Ｎ１）にはちょうどよいレベルであったが、短期留学プログラム生にはやや高度であったようである。（膽吹覚）

８．応用日本語１

・受講生：３名(台湾２名、インドネシア１名)
・授業時間：１コマ／週　総コマ数15コマ
・担当教員：山中和樹

１）教材及び授業の目標

・教材：テレビドラマＤＶＤ「僕の生きる道」全11話(各45分)
・最近の代表的なテレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

２）授業方法

１コマで１話を学習する。まず、ＤＶＤを見て、ストーリーの概略を把握させる。次に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の感想及び自国との相違に関するレポートを提出させる。レポートは翌週、チェックした上で返却する。

最初の１コマはガイダンスに当てた。ＤＶＤは全11話であるが、１話を１コマで見る。ＤＶＤを見た後、その回のスクリプトを配布する。時間終了まで、スクリプトの解説をするが、どうしても時間が足りない。それで、３話続けて見たあと、３話分のスクリプトの説明の残りを１コマ使って行う。このようにして、スクリプトの説明で４コマ使った。

３）評価と課題

・この科目は共通教育科目「応用日本語Ⅱ」との合同授業である。正規の学部生、特別聴講生（交換留学生）も参加するので、日本語力の差が懸念されたが、レポート、授業態度を見る限りでは、差は全く見られなかった。
・昨年度は、学部正規生と特別聴講学生の間で、一部私語の目立つ者がいたので、私語防止のため、同じ国の学生が前後左右にならないように、あらかじめ座席指定を行った。この結果、私語は防止できた。
・授業態度、毎回のレポート、期末試験より総合的に評価した。
・本ドラマは高視聴率を記録した人気ドラマで、学生にも好評であったが、すでに本国で視聴した学生もいて、もっと新しいドラマを希望するとの声もあった。（山中和樹）

９．多文化コミュニケーション１

・受講生：１名（中国１）

・授業時間：１コマ／週　総コマ数：15コマ
・担当教員：小幡浩司
１）目標
自文化の特性、相手の異文化の特性、そしてコミュニケーションに及ぼす文化の影響をそれぞれ理解することで、異文化相互理解を促進する。
２）方法
（１）授業方法
この科目は共通教育科目「多文化コミュニケーションＡ」との合同授業である。授業は、配布資料をもとに、講義、及びディスカッションからなる。学習内容は①文化の定義と特徴、②異文化適応、③異文化受容、④異文化理解と多文化共生、等であった。
（２）復習クイズ
復習クイズは実施していない。
（３）成績及び評価
成績はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、下記①～④から総合的な評価を行った。
①中間試験Ⅰ　（Take Home Exam）
②中間試験ⅠⅠ　（Take Home Exam）
③期末試験　（エッセイ）
④授業に対する積極的参加
（４）評価と課題
今期は日本人学生が４割、留学生が６割（４カ国）であったため、ディスカッションの時間と機会を増やし、異なる考えや価値観を認め、文化的背景の違いという側面からそれを理解する訓練を多く体験させることができた。また、中間、期末、いずれの試験もエッセイ問題とし、自らの意見を、具体的な事例を用いて、論理的に展開することを学生たちに強く要求した。
学生数が40名を超えたため、グループプロジェクトを断念し、評価方法を期末試験に変更した。学生がそれぞれの考えをぶつけ合い、グループとして一つのものを作り上げるという機会を与えられなかったことは反省点である。
この授業は共通教育科目との合同授業である。また、日本人学生との共同作業もあり、短プロ生の日本語能力が懸念されたが、今回は、特に問題はなかった。　（小幡浩司）

10. 伝統産業１

・受講生：18名（中国12、インドネシア３、台湾２、韓国１）
・訪問見学回数：６回（１回の見学は授業３コマ相当）
・担当教員：中島清
１）目標
伝統産業が地域や日本全体の産業技術の発展にどのように関っているのか。家内工業から出発した伝統産業がグローバル化にどう対処しているのか。伝統産業を守り、発展させながら、次世

代に技術継承するためにどのような課題があるのか。和紙の里、漆器会館、陶芸村など、伝統産業の同業者組合と共同施設の役割はどのようなものなのか。そのような視点から、日本の現代産業の背景にある伝統産業を通して現代の日本社会の理解を深める。

２）方法

福井の伝統工芸である、「越前焼」「越前和紙」「越前漆器」「越前打刃物」等の創作生産現場を６箇所訪問見学する。工房では伝統工芸の歴史、技術、後継者育成、課題等について専門家(伝統工芸士）の話を聞く。更に、研修施設での実習も行う。６回の訪問について毎回レポートを提出してもらい、理解の深まりを確認する。

３）評価と課題

成績評価：見学訪問先ごとに提出される報告書に基づき評価する。

・生産現場を直接訪問し、伝統工芸士から話を聞くので、講義等では得がたい、深い理解と確かな知識が得られている。

・従来、バス片道1時間圏内だけでなく、若狭地方、加賀地方の伝統産業見学も行っていたが、2006年度より、見学先を福井市郊外に限定することになり、その結果、見学先数の確保が難しく、実質後期のみの開講となっている。（中島清）

《むすび》

2013年度は、前期に中国、インドネシア、アメリカ、台湾の４カ国、後期に中国、台湾、インドネシア、韓国の４カ国からの留学生が短期留学プログラムの日本語・日本事情科目及び伝統産業科目を受講した。

2013年前期開講科目は、「日本事情２」、「多文化コミュニケーション２」、「多文化コミュニケーション３」及び「伝統産業２」が受講者ゼロであった。

「伝統産業２」の受講者がゼロであった理由は次のとおり。

「伝統産業」については、「伝統産業１」（後期開講）か「伝統産業２」（前期開講）のどちらかを履修することになっているが、2006年度より、見学先が福井市郊外に限定されたため、見学先の確保が難しく、実質、後期のみの開講になっていることによる。

2013年度後期は、新規に受け入れた18名（初級：９名、初中級：６名、中級３名）が、それぞれの日本語力に応じて「日本語初級１」、「日本語初級２」、「日本語初中級」、「日本語中級」を受講した。中級クラスは３名だったが、実質的には上級レベルの学生も１名いた。ただし、いきなり上級クラスを履修すると、修得単位数が不足するので、まずは、中級クラスに入ってもらった。そういうわけで、「日本語上級(日本語Ｆ／Ｈ)」の受講者がゼロになった。（山中和樹）

３．全学向け日本語コース

１．概要

本コースは本学で学ぶすべての留学生及び外国人研究者を対象として開設された日本語の補講コースである。本年度は例年通り前後期ともに日本語Ⅰ～Ⅳの４クラスを開講した。

２．開講科目と教科書

① 日本語Ⅰ（後期）……『みんなの日本語初級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）
② 日本語Ⅱ（前期後期共通）……『みんなの日本語初級Ⅱ』（同上）
③ 日本語Ⅲ（前期後期共通）……『みんなの日本語中級Ⅰ』（同上）
④ 日本語Ⅳ（前期）……『上級学習者のための日本語読解ワークブック』（アルク）
　日本語Ⅳ（後期）……『みんなの日本語中級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）

３．プレースメント・テスト

前期：2013年４月12日（金）　受験者数16名
後期：2013年10月18日（金）　受験者数15名

４．継続受講者数

		日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	登録可能	7	5	5	13	30
	登録数	2	4	4	5	15
	登録率	29	80	80	38	50
後期	登録可能	2	1	4	16	23
	登録数	1	1	2	6	10
	登録率	50	100	50	38	43

５．受講登録者数

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	3	5	11	9	28
後期	10	4	6	11	31

６．授業報告

《前期》

①　日本語Ⅰ

・受講者：３名（中国２名、東ティモール１名）

・授業時間：５コマ／週　72コマ

・担当教員：澤崎幸江、高瀬公子、＊小野知恵美

・コーディネーター：桑原陽子

１）教科書及び授業の目標

・『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅰ翻訳・文法解説』（スリーエーネットワーク）

・日本語の基本的な語彙と文法を習得し、簡単なコミュニケーションができるようになる。

２）方法

（１）授業

１課を２コマで進める計画を立てたが、クラスが始まってから、受講生の出席状況に合わせ、１コマで終えた課も数課あった。３課ごとに復習を行い、各テスト前の復習の時間も合わせ計11回復習の時間を設けた。復習には、教科書の復習Ａ～Ｅ、文型練習帳の文法チェックシート等を用いた。メインテキストの他に、文型練習帳も活用し、表現の定着や書く技能の向上を目指した。

ひらがな、カタカナについては『ひらがな・カタカナれんしゅう』でひらがなは１日２課、カタカナは１課ずつ進めた。カタカナは教科書終了時も書き取りが不十分であったため、その後もしばらくカタカナ語を含む文単位のディクテーションや、日常よく使用するカタカナ語の復習を行った。

（２）復習テスト･期末テスト

１～13課、14～19課、20～25課をひとまとめにして、復習テストを３回行った。テスト後に解答、解説し、習得が不十分と思われる箇所の指導を行った。

（３）成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テスト各５％、期末テスト85％に換算して総合点で判断した。

３）評価と課題

受講生３名の日本語力の差が大きく、また出席可能日もばらつきがあったため、出席する学生に合わせ、導入の課の順番を入れ替えたり、１日で１課を終えたり等、カリキュラムに工夫が必要だった。出席時間数が少ない学生は、まだ学習不十分なところもあるが、受講生達は皆真面目で熱心に学習に取り組み、話す・聞く・書く力とも向上し、開講時よりも積極的に日本語を使うようになった。少人数で、それぞれに合わせて進めることができたことが成果につながったと考える。

（小野知恵美）

②　日本語Ⅱ

・受講者：５名（中国３名、モンゴル１名、フランス１名）
・授業時間：５コマ／週　合計71コマ
・担当教員：＊澤崎幸江、高瀬公子、小野知恵美、星摩美
・コーディネーター：桑原陽子

１）教科書及び授業の目標

・教科書：『みんなの日本語Ⅱ』『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説』（スリーエーネットワーク）
・日本語の基礎的な語彙と文法を習得し、簡単なコミュニケーションができるようになる。

２）方法

（１）授業方法

26課から50課まで、１課をおよそ２コマで終えるペースで授業を進め、また、３課ごとに復習日を設け、学習した語彙や文法を復習したほか、復習テストの前にも試験範囲の課の復習を行った。漢字は漢字圏の学生は『みんなの日本語初級Ⅱ漢字英語版 』（26～50課）の漢字、非漢字圏は『みんなの日本語初級Ⅰ　漢字英語版』（１～25課）の漢字の読みを中心に学習した。

（２）復習テスト・期末テスト

期間中３回復習テストを実施し、受講生の学習事項の定着具合を確認し、その結果に基づいて、適時解答、解説を行った。学期末にはまとめとして期末テストを実施した。敬語（49課、50課）については、復習テストには出題したが、期末テストには出題しなかった。

（３）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで復習テスト各５％、期末テスト85％に換算して総合点で総合成績を判断した。

３）評価と課題

毎週５コマ授業があったが、ほとんどの学生はほぼ毎回授業に出席し、学習態度も非常に真面目であった。漢字については、今期漢字圏の学生が３名在籍したが、「漢字の意味が分かるが読めない」という状態で、毎回辞書を使って読み方を調べながら学習を進めていた。ただ、一度学習した漢字も時間がたつと忘れてしまうことがよくみられたため、今後はより復習を重ねながら定着を図る必要がある。

（澤崎幸江）

③　日本語Ⅲ

・受講者：11名（中国８名、ミャンマー１名、ルーマニア１名、フランス１名）
・授業時間：４コマ／週　合計57コマ
・担当教員：市村葉子、＊齋藤ますみ、村上洋子
・コーディネーター：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・教科書：『みんなの日本語　中級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）
『みんなの日本語　中級Ⅰ文法解説書』（スリーエーネットワーク）

・中級前期レベル者と対象にし、初級から中級への橋渡しに必要な「話す・聞く」「読む・書く」の総合的な言語能力を培う。

２）方法

（１）授業

１課に４コマの時間を費やし、進めた。１コマの学習時間は90分である。教科書の「話す・聞く」、「読む・書く」の項目はそれぞれ事前に語彙、文法を導入、練習してから行った。各課終了後は課の「問題」やその他プリントなどで定着を図った。また、４課毎に計３回の復習テストを実施した。各復習テストの前日に復習の時間を設けた。期末テストに備え、総復習を２回行った。

（２）漢字学習

漢字については『みんなの日本語初級Ⅱ　漢字練習帳』より読み練習を中心に行った。

（３）成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テストで判定した。

１）評価と課題

授業は３名の非漢字圏の学生を含め、国際色豊かな和気あいあいとした雰囲気の中で進められた。週４日の授業で、申請時に週４日出席できるとした学生は11名中２名であった。そのため、３回実施した復習テストにおいても、曜日を変えて授業時間外に実施するなど全員が受験できるよう配慮した。授業の進度においても、皆出席出来ない学生のためにより工夫が必要であると考える。学期終了後の反省会では、より多くの授業時間が取れるよう、これまで実施してきた３回の「復習テスト」、学期末の「期末テスト」の計４回のテストに変え、来期から「中間テスト」、「期末テスト」の２回のみ実施を申し合わせた。（齋藤ますみ）

④　日本語Ⅳ

・受講者：９名（中国９名）

・授業時間：４コマ／週　56コマ

・担当教員：齋藤ますみ、星摩美、高瀬公子

・コーディネーター：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・教科書：『上級学習者のための日本語読解ワークブック』（アルク）

・日本語の文章に慣れ、背景知識と正しい文法知識を増やして、読解力を高める。また、」記述式問題と口述式問題を解きながら、書く力及び話す力も養う。

２）方法

（１）授業方法

上記のテキストは14分野、48の話題を扱っている。同じ分野からの話題が続かないように、各分野からの話題を一コマ一つずつ進めた。初めに、語彙・背景知識に関する質問に答えながら、文法と内容理解を扱った選択式問題を解いた。次に、記述式問題から適宜選んで、文章の

始めと終わりの対応や接続詞・副詞などに留意しながら文章を書く指導をした。口述式問題からも適宜選び、ディスカッションした。このほか、テキストから独立した「活動」を５回設け、ビデオ視聴、会話練習、作文練習等を行った。小テスト等は行わなかった。

（２）成績及び評価

成績評価は期末試験の結果を基にして授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

３）評価と課題

今期日本語Ⅳのコースの学生は特定の曜日しか出席できないという学生がほとんどであったため、各回完結の『上級学習者のための日本語読解ワークブック』はこのコースに合っていたと思われる。但し、テキストで扱われている中には難解だったり、専門的すぎる話題もあった。また、開講後、テキストが難しいからと日本語ⅣからⅢに移動した学生が１名いた。全学日本語Ⅳのクラスに合ったテキストがなかなか見つからないというのは課題である。受講申請は週２回が４名で最も多く、１回が２名、４回が２名、３回が１名だった。週４回受講申請した学生のうち１名は４回しか来なかった。実験や就職活動のため、だんだん出席が難しくなり、中盤以降、出席者は最大でも５名、平均して２～３名と少なかった。期末テストは４名が受け、全員合格だった。成績は優が３名、良が１名だった。（高瀬公子）

《後期》

①　日本語Ⅰ

・受講者：10名（中国７名、フランス１名、バングラデシュ１名、アメリカ１名）

・授業時間：５コマ／週　63コマ

・担当教員：桑原陽子（コーディネーター）、澤崎幸江、敷田紀子

１）教科書及び授業の目標

・教科書『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅰ文法解説書』

・日本語で簡単な口頭でのコミュニケーションができるようになる。

・日本語のひらがな・カタカナの読み書きができるようになる。

２）方法

（１）授業方法

１課をおよそ２日で終えるペースで学習した。副教材として、適宜聴解や文型練習プリント類を使用した。

（２）復習クイズ

学生の習得状況を確認するため、３回の復習クイズを実施した。

（３）成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習クイズ15％と期末試験85％として評価した。

３）評価と課題

出席者の学習態度は良好であった。学生の到達度に差があったが、クラス活動では良好な雰囲

気で、積極的に活動ができた。　（桑原陽子）

②　日本語Ⅱ

・受講者：４名（中国３名、モンゴル１名）
・授業時間：５コマ／週　63コマ
・担当教員：小野知恵美（10／21～11／27）、星摩美（12／2～1／29）、＊高瀬公子
・コーディネーター：桑原陽子

１）教科書及び授業の目標

・『みんなの日本語初級Ⅱ』『みんなの日本語初級Ⅱ文法解説各国語版』（スリーエーネットワーク）
・初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

２）方法

（１）授業方法

学習範囲は『みんなの日本語Ⅱ』の26～50課で、１課を大体２回のペースで行った。５課毎の復習、復習テストの前にその範囲の復習、50課終了後に総復習、計10回復習の時間を設けた。

１回の進め方としては、各課の導入項目を２回に分け、その日に導入した文法項目を基本練習から応用まで行った。副教材は主に『文型練習帳』『聴解タスク』を使い、会話ビデオも活用し、表現の定着や会話力の向上を図った。

また、漢字は非漢字圏と漢字圏の学生に異なった教材を使った。非漢字圏の学生には『みんなの日本語初級Ⅰ漢字英語版』の漢字を１日５～６字フラッシュカードで読む練習をし、２ユニット毎にプリントで復習させた。一方、漢字圏の学生には教科書の進度に合わせ、『みんなの日本語初級Ⅱ漢字英語版』及び『みんなの日本語初級Ⅱ漢字練習帳』からの漢字プリントを使用した。

（２）復習テスト・期末テスト

26～33課、34～41課、42～50課をひとまとめとして、復習テストを３回行った。テスト後に解答、解説し、習得が不十分と思われる個所の指導をおこなった。敬語をテスト範囲に加えるのは学習者の負担が大きいと判断し、期末テストの範囲は26～48課とした。漢字の学習意欲を高めるために復習テスト、期末テスト共に漢字の読みを10問出題した。漢字圏は読みを書かせる問題、非漢字圏は読みの４択問題とし、配点には含まず100点＋10点のように表示した。

（３）成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テストは各５％、期末テストは85％に換算して総合点で判断した。

３）評価と課題

授業中は皆まじめで、熱心且つ協力的に学習に取り組み、和やかな雰囲気で授業が進められた。特に週５回受講可能だった学生２名は出席率もよく、質問も活発で、学習したことを使って、いろいろ表現しようという意欲が見られ、着実に力をつけていった。受講生４名のうち、期末テス

トを受けるための出席率を満たしたのは３名だった。今期は毎回来られない学生のために、できるだけ多く復習の時間をとったが、来期からコマ数が減るため工夫が求められる。　（高瀬公子）

③　日本語Ⅲ

・受講者：６名（中国２名、韓国１名、オーストリア１名、ルーマニア１名、フランス１名）
・授業時間：４コマ／週　合計50コマ
・担当教員：高瀬公子、＊齋藤ますみ
・コーディネーター：膽吹覚

１）教科書及び授業の目標

・教科書：『みんなの日本語　中級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）
　　『みんなの日本語　中級Ⅰ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
・中級前期レベル者と対象にし、初級から中級への橋渡しに必要な「話す・聞く」「読む・書く」の総合的な言語能力を培う。

２）方法

（１）授業方法

１課を約３コマで進めた。１コマの学習時間は90分である。教科書の「話す・聞く」、「読む・書く」の項目はそれぞれ事前に語彙、文法を導入し、練習を行った。２課終了毎に教科書の「問題」で復習し定着を図った。又、中間、期末テストの前には復習時間を設けテストに備えた。

（２）漢字学習

漢字については『みんなの日本語初級Ⅱ　漢字練習帳』より読み練習を中心に行った。

３）成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、中間テスト及び、期末テストで判定した。

４）評価と課題

今期のクラスは出身が５カ国から成る国際色豊かな構成で、時には異文化について積極的に意見が出るなど、活気のある楽しいクラスであった。漢字については非漢字圏の学習者が多く苦労していたが、事前に配布したプリントを予習してくる学習者もおり、皆熱心に取り組んだ。今年度前期までは、コース期間中に期末テストの他に、復習テスト３回の計４回のテストを行なっていた。しかし後期より、中間テストと期末テストの２回のみの実施に変更した。１回における試験範囲は広くなったもの、授業コマ数が減ったことも考慮すると、テスト２回は学習者の負担を軽減し、妥当な策だったと思われる。又、今期初めて期末試験に口頭テストを試みた。比較的早い段階から通知していたので、授業中も積極的に構文を使うなど、受講する際の動機付けに一役買ったようだ。今後もこの口頭テストは充実させ、継続して行っていきたい。

（齋藤ますみ）

④　日本語Ⅳ

・受講者：11名（中国９名、ミャンマー１名、ドイツ１名）
・授業時間：４コマ／週　合計50コマ
・担当教員：高瀬公子、齋藤ますみ、星摩美
・コーディネーター：山中和樹

１）教科書及び授業の目標

・教科書：『みんなの日本語　中級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）
　　『みんなの日本語　中級Ⅱ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
・中級中期～後期レベルを対象とし、４技能の力を総合的に伸ばすことを目標とした

２）方法

（１）授業方法

初めて使用する教材で、１課を４回で進めることとした。再履修者を念頭に置き、表現活動（話す・書く）にも十分な時間をとり、学習者が自分のレベルに合わせたレベルで表現活動を行うことを目指した。１時間目で読解を行ない、語彙、文型の導入練習により表現活動に必要な言語知識のインプットと、表現活動のための導入読解を行う。２時間目は、１時間目にインプットされたものを活用し、書いて表現することを目指した。３時間目は会話聴解を導入し、口頭表現に必要な語彙表現の導入練習、４時間目はそれを使った口頭での表現活動とその課のまとめを行うように計画した。

（２）漢字学習

今回は非漢字圏の学習者が２名いたため、漢字については『みんなの日本語　中級Ⅱ』の読解本文に出てくる漢字の読み練習を行った。

３）成績評価

期末テスト１回で判定した。

４）成果と課題

受講生の授業への取り組みはとても熱心で、積極的に課題に取り組んでいた。ただ、授業との重なりや研究活動、就職活動で継続して出席できない受講生が多い。再履修者と、日本語Ⅲから進級した学生、ＰＴで入ってきた学生の間で、レベル差があり、学期はじめに計画したように授業を進めることは難しかった。今回使用した教材はインプット量が多く、日本語Ⅲから進級した学生とＰＴでクラスに判定された学習者には、導入された項目を消化するだけで、かなりの時間がかかり、表現活動を行う時間が不足してしまった。非漢字圏学習者のためにこれまで行ってこなかった漢字の学習を入れたが、非漢字圏の学習者には不十分であった。今回使用した教材は、初級レベルの漢字には振り仮名がなく、それも学習者の理解の妨げとなった。日本語Ⅳは再履修が認められており、再履修者と進級者のレベル差が常に問題となる。全学コースのつながりも考慮したレベル設定と教材の選定、非漢字圏学習者へのコースを通したケアが課題である。

（星摩美）

７．コース全体の課題

受講者数が前期28名、後期31名となり、昨年度と比較すると、前期後期ともに20％ほど減少した。本学の留学生数の減少もその一因であるが、本コースが留学生に周知されていないこともその原因と考えられる。今後は留学生の約80％が所属する工学部・工学研究科の掲示板などへの告知をはじめ、教員への情報発信もする必要があるだろう。

４．日本語能力試験対策講座

《前期》

①　日本語能力試験対策講座Ｎ－１クラス

・受講者：20名（中国18、マレーシア１、ウガンダ１）
・授業時間：２コマ／週　総コマ数：30コマ
・担当教員：小野知恵美
・コーディネーター：山中和樹

１）教材

・『「日本語能力試験」対策　日本語総まとめＮ１文法』（アスク出版）
・『「日本語能力試験」対策　日本語総まとめＮ１語彙』（アスク出版）
・『新完全マスター読解・日本語能力試験Ｎ１』（スリーエーネットワーク）
・『新完全マスター聴解・日本語能力試験Ｎ１』（スリーエーネットワーク）
・『日本語能力試験　スーパー模試Ｎ１』（アルク）
・『日本語能力試験　模試と対策Vol. 2』（アスク出版）
・『日本語能力試験JLPT公式問題集Ｎ１』（凡人社）

２）授業方法

４月の中旬から週２コマの授業を行い、６月の土曜日に２回、模擬試験と解説を行った。メインテキストとして、『日本語総まとめ』シリーズの語彙、文法を使用し、それぞれ６日分を毎週の宿題とし、授業で宿題の範囲のチェック問題（テキストの「７日目」）を解き、解説をした。読解、聴解は、試験の問題形式（大問１問）ごとに練習問題を行い、その中から全体に正解しにくい形式の問題を繰り返し練習し、苦手分野の克服を目指した。文字語彙はほぼ毎回、文法は１回おきに取り上げ、読解、聴解は、できるだけ毎回取り組むようにし、１コマに２、３科目進めた。

３）評価と課題

登録した学生のほとんどが、ほぼ毎回出席し、欠席する場合も友人が授業で使用したプリントを渡すなど、皆熱心に受講していた。模擬試験も、多くの学生が２回とも受講した。能力試験を受験したのは19名で、６名が合格した。

前回の反省点として、語彙や文法に時間をとられ、読解、聴解に当てる時間が少なくなりがちだったため、進め方を改善した。読解も宿題にすることもあったが、提出率もよく、皆の解答をチェックした上で解説することができ、時間の節約や苦手分野の把握につながった。

受講時から日本語力の差はあり、合否にもそれが表れてはいるものの、不合格者の点数も低くなく、多くの学生がＮ１レベルに近づいたと言える。今回合格に届かなかった学生たちも、引き続き様々な問題を解き、対策を続けて是非再チャレンジしてほしい。　（小野知恵美）

②　日本語能力試験講座Ｎ－２クラス

・受講者：13名（ラトビア１名、アメリカ１名、台湾１名、中国９名、フランス１名）

・授業時間：２コマ／週　合計30コマ（１回４コマの模擬試験２回を含む）
・担当教員：高瀬公子
・コーディネーター：山中和樹
１）教材（以下のものより抜粋）
・『日本語総まとめ　Ｎ２　文法編』（アスク出版）
・『日本語総まとめ　Ｎ２　語彙編』（アスク出版）
・『試験に出る読解』（桐原書店）（Ｎ２の部分）
・『試験に出る聴解』（桐原書店）（Ｎ２の部分）
・『合格できる日本語能力試験　Ｎ２』（アルク）
・『日本語能力試験に出る文字・語彙１・２級』（国書刊行会）
・『日本語能力試験　Ｎ２　模試と対策Vol. 2』（アスク出版）
・『日本語能力試験公式問題集Ｎ２』（凡人社）
２）授業方法
第１日目はオリエンテーションとし、Ｎ２の問題紹介及び授業の進め方を説明した。毎回、漢字・語彙に10分程度、聴解と読解にそれぞれ20分程度、文法に40分程度の目安で行った。
文法は『日本語総まとめ　Ｎ２　文法編』をテキストとして使用した。８週目に接続表現を扱っていて、読解・聴解の基礎にもなるので、初めにオリエンテーションの日を含む３コマ使って行った。１～７週目は１コマで３日分ずつを解説し、一緒に問題練習を行った。実践問題は宿題とした。語彙は『日本語総まとめ』及び『合格できる日本語能力試験』、漢字は『日本語能力試験に出る文字・語彙』及び『合格できる日本語能力試験』の一部を配布し、毎回範囲を指定して宿題とし、授業で答え合わせ及び解説を行った。聴解・読解はそれぞれ『試験に出る聴解』『試験に出る読解』を使って毎回予定表にしたがって練習問題をした。
また、試験の３週間前と１週間前に聴解を含む模擬テストを実施し、その日に解答解説を行った。１回目はアスク出版、２回目は凡人社の問題を使用した。
模擬テスト以降のクラスは弱点対策とし、主に聴解の概要理解と即時応答及び文法問題の練習にあてた。
３）評価と課題
１名はＮ３受験希望で、授業についてこられないと判断し、Ｎ３用の資料を渡し自習してもらった。また、クラスには参加しないが、プリントのみ希望という学生が３名いた。『みんなの日本語Ⅱ』レベルの学生もいたが、熱心に授業に参加し、質問も活発で、意欲が感じられた。Ｎ３受験1名を含む14名が受験し、９名が合格した。（高瀬公子）

《後期》

①　日本語能力試験対策講座Ｎ－１クラス

・受講者：15名（中国13、インド１、ウガンダ１）
・授業時間：２コマ／週　総コマ数：30コマ

・担当教員：小野知恵美
・コーディネーター：山中和樹
１）教材
・『「日本語能力試験」対策　日本語総まとめＮ１文法』（アスク出版）
・『「日本語能力試験」対策　日本語総まとめＮ１語彙』（アスク出版）
・『新完全マスター読解・日本語能力試験Ｎ１』（スリーエーネットワーク）
・『新完全マスター聴解・日本語能力試験Ｎ１』（スリーエーネットワーク）
・『日本語能力試験　模試と対策Vol.2』（アスク出版）
・『あなたの弱点がわかる！日本語能力試験Ｎ１模試』（UNICOM）
・『ゼッタイ合格！日本語能力試験完全模試Ｎ１』（Ｊリサーチ出版）
・『日本語能力試験　スーパー模試Ｎ１』（アルク）
２）授業方法
　９月の中旬から週２コマの授業を行い、11月の土曜日に２回、模擬試験と解説を行った。語彙・文法・読解・聴解から１コマに２、３科目進めた。メインテキストとして、『日本語総まとめ』シリーズの語彙、文法を使用し、それぞれ６日分を毎週の宿題とし、授業で宿題の範囲のチェック問題を解き、解説を行った。読解、聴解は、『新完全マスター』シリーズから試験の問題形式（大問１問）ごとに練習問題を取り上げた。読解は主に宿題にし、回収してチェックした後に解説を行った。
３）評価と課題
　登録した学生のうち受講したのは10名程度で、７名が継続して出席した。能力試験を受験したのは13名で、５名が合格した。
　受講生は皆熱心で質問や発言も多く、練習したい科目や問題形式の希望が挙がるなど、授業は活発に行われた。
　Ｎ１に１度の受験で合格することは容易ではなく、Ｎ２合格から間もない場合はさらに難しい。今回の受験者の中でも半数以上が再受験だったが、その中で受講を続けた学生は皆合格した。２期出席を続ける意欲の強さと本人の努力はもちろんのことだが、対策講座の効果も表れているだろう。受験する学生には、是非受講を続けて合格に近づいてほしいと思う。　　（小野知恵美）

②　日本語能力試験対策講座Ｎ－２クラス

受講者：６名（中国５名、ドイツ１名）、聴講１名（台湾）
・授業時間：２コマ／週　合計30コマ（９月～11月　１回４コマの模擬試験２回を含む）
・担当教員：星摩美
４）教材
・『日本語総まとめ　Ｎ２　文法編』（アスク出版）
・『日本語総まとめ　Ｎ２　語彙編』（アスク出版）　抜粋して使用
・『完全マスター　読解　日本語能力試験Ｎ２』（スリーエーネットワーク）

・『完全マスター　聴解　日本語能力試験Ｎ２』（スリーエーネットワーク）
・『日本語総まとめ　Ｎ２　語彙編』（アスク出版）
・『日本語総まとめ　Ｎ２　文字編』（アスク出版）
・『日本語総まとめ　Ｎ２　聴解編』（アスク出版）
模擬試験、練習用として使用
・『日本語能力試験　Ｎ２　模試と対策　vol. 1』（アスク出版）
・『日本語能力試験　Ｎ２　模試と対策　vol. 2』（アスク出版）
・『日本語能力試験　公式問題集Ｎ２』（凡人社）

５）授業方法

初回で、試験科目や内容等についてオリエンテーションを行い、聴解、読解についてどのような形式のものができるか、どのようなスキルが必要かを体験した。

２回目以降１回目模擬テストまでは語彙、文法を隔週で授業の半分を使って行い、残りの時間を聴解、読解にあてた。１回目模擬試験後は、比較的点数が低かった文法と読解を中心に練習を行い、２回目模擬試験から本試験までは、全員が難しいと考えていた読解を速読することを中心に行った。

各科目の進め方としては、語彙と文法は主教材を宿題として課し、授業ではチェックテストを行い、解説した。聴解は即時応答の会話独特の表現を中心に授業を進めた。読解は読むスピードに個人差が大きく、時間を取り、学習者のペースで進めるようにした。漢字については、宿題として課した。

６）評価と課題

講座開始時から参加した学習者４名は、日本語力としては中級前期終了程度で、レベル的には適した学習者だったが、短期プログラムで来日し、途中参加となった１名は初級後半が終了していない学習者であり、言語知識が不足していた。聴解力も来日直後でかなり困難を感じていたようだ。

しかし、授業参加者はみな熱心で、それぞれ努力し、短期間に多くの言語知識を増やせた。しかし運用力である聴解、読解力はやはり短期間での習得は難しく、言語知識に比べて伸びは小さかった。

聴講１名は試験の申し込みに来日が間に合わず、受験しなかったが、授業には参加した学生。

（星摩美）

《まとめ》

前期のＮ－１コースの受講者が多く、教室がほとんど満席になった。後期の受験予定の者が１名聴講を希望したが、断らざるを得なかった。今後、受講者が増えれば、国際交流センターの教室では収容しきれないので、大学のその他の教室を使用することも検討しなければならない。

国際交流センター主催の日本語能力試験対策講座受講生は能力試験の団体申込みを前提にしているが、前期のＮ－１コースには個人申し込みをしてから、受講を希望した学生が２名いた。こ

れらの学生も結果発表後、合格したことが判明したが、詳細は把握できていないので、下記の表からは除いている。

前期のＮ－２コースの受講者のうち１名は、受験申込直前にＮ－２希望からＮ－３希望に変更した。Ｎ－３に対応するコースは設けていないので、
今後、このようなケースも発生するかもしれない。Ｎ－３コースの開設は、予算上の問題もあるので、当面、困難であると思われる。

2013年度の日本語能力試験の受験結果は次のとおり。

		対策講座受講者数	日能試受験者数	合格	不合格
前期	Ｎ－１	20	19	6	13
	Ｎ－２	16	13	9	4
	Ｎ－３		1	0	1
後期	Ｎ－１	15	13	5	8
	Ｎ－２	7	7	5	2

（山中和樹）

５．共通教育科目・日本語日本事情系科目

《概要》

2013年度、センター教員は、センター開講科目以外に、共通教育センターが開講する基礎教育科目・外国語科目としての日本語科目と、教養教育副専攻科目の日・中言語文化系及び日本語・日本文化系科目を担当した。2013年度の開講科目は以下の通りである。

《2013年度　開講科目一覧》

科目	開講時間	単位	担当教員
日本語科目			
日本語Ａ	前期火３	２	桑原陽子
日本語Ｂ	後期火３	２	山中和樹
日本語Ｃ	前期火４	２	山中和樹
日本語Ｄ	後期火４	２	膽吹覚
日本語Ｅ	前期火３	２	膽吹覚
日本語Ｆ	後期火３	２	桑原陽子
日本語Ｇ	前期火４	２	桑原陽子
日本語Ｈ	後期火４	２	山中和樹
日・中言語文化系　　日本語・日本事情系科目			
応用日本語Ⅰ	前期月２	２	山中和樹
応用日本語Ⅱ	後期月１	２	山中和樹
日本の文化	前期木１	２	膽吹覚
日本事情Ａ	前期火１	２	膽吹覚
日本事情Ｂ	後期火２	２	膽吹覚
多文化コミュニケーションＡ	後期木１	２	小幡浩司
多文化コミュニケーションＢ	前期集中	２	小幡浩司
多文化コミュニケーションＣ	前期集中	２	小幡浩司

＜日本語Ａ＞

【受講生】10名（正規生５名、非正規生５名）

【目標】レポートの書き方を学ぶ

【教材】佐々木瑞枝・細井和代・藤尾喜代子著「中・上級者用日本語テキスト　大学で学ぶための日本語ライティング」The Japan Times

【方法】教科書に沿って、レポート執筆に必要な表現や文型を学ぶ。ほぼ毎回、練習問題やレポート執筆（２回）の課題を出した。

課題レポート（60点）と提出物・授業態度（40点）を総合的に評価した。

【評価と課題】

・授業態度は非常に良好で、ほぼ全員が課題レポートにまじめに取り組んだ。

・初級文法が定着していないところがあり、毎回の課題でかなりの時間を割いて注意が必要であった。（桑原陽子）

＜日本語Ｂ＞

【受講生】６名（正規生２名　交換留学生４名）

【目　標】

・「テ形」と連用中止の使い分け、「は」と「が」の使い分け、「のである」文の用法や文の接続などを学習し、それらを実際の作文で使用できるようにする。

【教　材】プリント教材

【方　法】

・平均すると、大体２～３コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。

・成績評価：中間試験(40%)、期末試験(60%)

【評価と課題】

・正規生の内訳は、マレーシア２名。交換留学生の４名はすべて中国出身。このほかに、短期プログラムの学生が３名（中国、台湾、インドネシア各１名）だった。

・ルビなしの本文の理解に困らないように、主に非漢字圏の学生のために、漢字の読みのプリントを全員に配布した。各課の初めに漢字の読みのプリントを配布し、漢字の読み及び意味について確認した。試験問題も漢字が負担にならないように配慮した。

ただ、今期の非漢字圏の学生の漢字レベルは比較的高く、特に、漢字が学習の支障になるようなことは感じられなかった。

・今期は、「テ形」と発見や条件の「と」の使い分けなどに関しても、いくらか触れたが、やや不十分だったかと思う。（山中和樹）

＜日本語Ｃ＞

【受講生】７名（学部生１名　特別聴講学生６名：中国４名、ドイツ２名、マレーシア１名）

【目　標】

・擬音語・擬態語や助詞の使い分けなどに関するテーマの文章を読んで初級のまとめをし、それらを実際の作文で使用できるようにする。

【教　材】プリント教材
【方　法】
・平均すると、大体２～３コマに１課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。
・成績評価：中間試験(50%)、期末試験(50%)
【評価と課題】
・この授業は短プロの中級日本語との合同授業である。７名の学生のうち、漢字圏は４名で、３名は非漢字圏である。一方、今期の短プロの学生４名は漢字圏である。漢字圏の学生であっても、正確に漢字が読めないこともあるので、漢字の読みのプリントを全員に配布した。出席と授業態度は良好で、１名を除き皆勤だった。皆勤ではない１名も欠席が１回だけだった。
・今期の正規生はマレーシア出身だが、学習意欲も成績も特別聴講生や短プロの学生以上であった。漢字の読みのプリントを配布したので、漢字のハンディは感じられなかった。
・交換留学生の２名はドイツ出身で、漢字に限らず、日本語能力にハンディがあったので、授業のスピードや試験問題の難易度は落とさざるを得なかった。毎年、ドイツからの交換留学生を受け入れているが、今期の学生は授業についていくのが大変であったが、本人の努力もあり、合格点を取ることができた。（山中和樹）

＜日本語Ｄ＞
【受講生】７名（学部生名１、科目等履修生５名、日研生１）
【目標】日本語中級レベルの留学生を対象として、日本語の会話力の向上を図る。
【教材】『マンガで学ぶ日本語会話術』（アルク）
【方法】
・第１～36課（全50課）まで行なった。教科書に従って、「マンガ」（ＣＤ）―解説―「練習」の順に進めた。
・成績および評価　中間試験（50%）・期末試験（50%）
【評価と課題】
受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、２回の定期試験の結果を見る限り、当初の授業目標は達成できたと判断してよいであろう。テキストも親しみやすく、受講生からの質疑も活発であった。（膽吹覚）

＜日本語Ｅ＞
【受講生】26名（学部生名12、科目等履修生名13、日研生１）
【目標】
・日本語で書かれた著名なエッセイ・小説・評論など、内容のあるまとまった分量の読み物を読んで、読解する能力を養う。
【教材】『中上級向け日本語教材　日本文化を読む』（アルク）

【方法】
・１コマにつき１課のペースで進めた。
・教科書の設問に沿って学生の理解を深めながら、最後に作品全体の理解を図った。
・成績評価：期末試験（100%）
【評価と課題】
・受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限り、当初の授業目標は達成できたと判断してよいであろう。村上春樹や吉本ばななどなど、受講生にも興味深い作家が登場したことが功を奏したのかもしれない。
・工学部の学生には内容的に難しかったかもしれない。また、彼らにとっては他の工学部科目との関係も希薄な内容になってしまった。しかし、本クラスの過半数を占める短期留学の中国人留学生（Ｎ１合格）のニーズを考慮とすると、こうした教材となってしまった。今後は工学部学部生に必要な日本語と中国からの短期留学生に求められている日本語とのギャップを如何に埋めるか、という問題をクリアすべく検討を重ねたい。（膽吹覚）

＜日本語Ｆ＞
【受講生】21名（正規生７名、非正規生14名）
【目標】インターネットサイトのニュース記事・新書から時事問題を取り上げ、関連語彙・表現を学び効率よく読む技術を身につける。特に、予測して読む力をつけることを重視する。また、授業中に読んだ素材を要約する、複数記事の相違点を比較するなどレポートとしてふさわしい文章を作成する。
【教材】ニュース記事等の生教材
【方法】インターネットサイトの記事を素材として使用し、具体的な読みの技術を提示して読む練習を行った。必要に応じてピアリーディングを行い、回答の是非についてはクラス内で議論を行った。読解記事の要約、書き換え等の課題を課し、書く訓練を行った。大学生活に必要名なメールの書き方も学習した。
　レポート課題（各10点　自由提出・最大14回）のうち得点の高い10回分を評価対象とした。
【評価と課題】
・授業態度は非常に良好で、全員積極的に参加した。
・できるだけ授業中に書く時間をとることによって、丁寧な指導ができた。（桑原陽子）

＜日本語Ｇ＞
【受講生】19名（正規生１名、非正規生18名）
【目標】様々なタイプのスピーチの方法を学び、わかりやすく伝えられるようになる。
【教材】プリント
【方法】４種類のスピーチを行った。そのうち、情報提供（25%）、意見（30%）、提案（40%）の３つのスピーチと、授業への参加度（５%）を総合して評価した。

教師だけでなく、受講生どうしがお互いに評価を行った。

【評価と課題】

・授業態度は非常に良好で、積極的に参加した。

・パワーポイント作成指導の時間が不十分だったので、次回はパワーポイント活用をどのように授業に取り入れるかが課題である。（桑原陽子）

＜日本語Ｈ＞

【受講生】14名（学部生２名、特別聴講学生12名：全員、中国出身）

【目　標】

・外国語学習における音声の重要性、場面に応じた礼を失しない表現、擬音語・擬態語や助詞の使い分けなどに関するテーマの文章を読んで、それらを実際の場面で使用できるようにする。

【教　材】プリント教材

【方　法】

・平均すると、大体２～３コマに１課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。

・成績評価：中間試験（40%）、期末試験（60%）

【評価と課題】

・学部正規生と特別聴講学生の全員が中国出身であり、レベルも上級なので、振り仮名なしの生教材を用いたが、漢字の読みには特に支障はなかった。出席と授業態度はおおむね良好だった。

・今期の２名の学部正規生は、特別聴講学生と比較して、学習意欲が低く感じられた。２名のうちの１名は残念ながら、成績も振るわず、単位取得のレベルには達しなかった。

・特別聴講学生はほとんど、熱心に授業を受け、成績も優秀だった。（山中和樹）

＜日本事情Ａ＞

【受講生】17名（学部生６名、科目等履修生10名、日研生１名）

【目標】

・日本の現代社会、主に生活・社会・教育に関する文章を読み、その大意を理解し、それについて意見文を書くことで、日本に関する知識を醸成し、理解を深めた。

【教材】『留学生のための時代を読み解く上級日本語』（スリーエーネットワーク）

【方法】

・１課を２コマのペースで進めた。読解後は教科書の設問を課し、理解を深めるように図った。また、課ごとに宿題（意見文800字）を課した。

・成績評価：期末試験（100%）

【評価と課題】

・教科書の本文が受講生の日本語能力より少し高めであったので、受講生には負担の多い授業であったと思うが、予習と復習（宿題）の重要性に彼ら自身が気づくことができたようである。

この点が本クラスの収穫と言えよう。その一方で、受講生間の議論が十分に深められなかった点が反省される。この点を後期の課題としたい。（膽吹覚）

＜日本事情Ｂ＞

【受講生】18名（学部生名１、科目等履修生16名、日研生１）

【目標】日本語中上級レベルの留学生を対象として、現代日本社会が抱える諸問題について書かれた文章を読解し、それについて日本語で議論を深める

【教材】『留学生のための時代を読み解く上級日本語』（スリーエーネットワーク）

【方法】

・東日本大震災に関する記事を読んで、それについて各自がスピーチし、チームに分かれてディベートを行ない、最後にそれについての所見を日本語で書かせた。

・成績および評価　スピーチ・ディベート（50%）・レポート（50%）

【評価と課題】

受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、スピーチ・ディベートともに活発に行なわれた。東日本大震災から３年が経過した時期に、このテーマで行なうことの意義も懸念されたが、受講生の関心は教員の予想を上回るものであった。ただ、原子力発電所の将来に関するディベートでは、共通教育科目で履修する学生（Ｎ１）にはちょうどよいレベルであったが、短期留学プログラム生にはやや高度であったようである。（膽吹覚）

＜日本の文化＞

【受講生】26名（学部生10名、科目等履修生15名、日研生１名）

【目標】

・マンガを楽しみながら日本人の考え方や季節感、現代日本の家族について学ぶ。

【教材】『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』（アルク）

【方法】

・教科書にそって講義形式で進めた。確認問題と応用問題は授業に行った。

・成績評価：期末試験（100%）

【評価と課題】

・マンガを教材とすることで受講生の興味関心をひくことができた。

・受講生からの質問も活発で、積極的な授業参加が行われた。（膽吹覚）

＜多文化コミュニケーションＡ（異文化コミュニケーションＡ）＞

【受講生】42名（日本17名、中国20名、マレーシア３名、ドイツ１名、オーストリア１名）

【授業時間】１コマ／週　総コマ数：15コマ　【担当教員】小幡浩司

１）目標

自文化の特性、相手の異文化の特性、そしてコミュニケーションに及ぼす文化の影響をそれぞ

れ理解することで、異文化相互理解を促進する。

２）方法

（１）授業は、配布資料をもとに、講義、及びディスカッションからなる。学習内容は①文化の定義と特徴、②異文化適応、③異文化受容、④異文化理解と多文化共生、等であった。

（２）復習クイズ

復習クイズは実施していない。

（３）成績及び評価

成績はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、下記①～④から総合的な評価を行った。

① 中間試験Ⅰ　（Take Home Exam）

② 中間試験ⅡⅠ（Take Home Exam）

③ 期末試験　（エッセイ）

④ 授業に対する積極的参加

３）評価と課題

今期は日本人学生が４割、留学生が６割（４カ国）であったため、ディスカッションの時間と機会を増やし、異なる考えや価値観を認め、文化的背景の違いという側面からそれを理解する訓練を多く体験させることができた。また、中間、期末、いずれの試験もエッセイ問題とし、自らの意見を、具体的な事例を用いて、論理的に展開することを学生たちに強く要求した。

満足度調査を行った結果、約85％の学生から大変満足との回答を得た。ただし、注意点として、日本語の問題から、留学生が板書に頼る傾向があり、内容を整理してほしいというリクエストが複数あった。今後は十分に気を付けたい。　（小幡浩司）

＜多文化コミュニケーションＢ（異文化コミュニケーションＢ）＞

【受講生】17名（中国３名、日本14名）

【期　間】９月17日(火)～９月20日(金)　集中講義

【目　標】

① 今日の国際関係、グローバル化社会を理解する。

② 多文化理解とコミュニケーション能力の必要性を理解する。

③ 文化とコミュニケーションの関係を理解する。

④ 日本人のコミュニケーションスタイルを理解する。

【教　材】プリント

【方　法】

（１）授業内容

授業はプリントを利用した講義、ディスカッションから成る。学習内容は、①コミュニケーションの定義：フィールド理論、②多文化コミュニケーションと文化融合、③国際関係概観、④グローバリゼーション：多様性と画一性、⑤世界の高等教育事情、⑥コンテキスト、⑦日本人のコミュニケーションスタイル。

（２）エッセイ

「自己形成と文化」、「グローバリゼーション：文化の画一性と多様性」、「今日の国際関係」というテーマで3つのエッセイを作成させた。

（３）成績及び評価

エッセイ70点、出席・授業への参加30点、の合計100点を満点として評価した。

【評価と課題】

（１）予習（reading assignment）をして講義に臨むような授業形態を試みたが、十分に浸透させることができなかったことは反省点であり、この改善が今後の課題である。

（２）グローバリゼーションと文化についてのディスカッションでは、活発な意見が出された。その中で異文化コミュニケーションの重要性について深い理解が得られたと思う。

（３）学生のエッセイを通じて、文章力、クリティカルシンキング、そして理屈の展開力が弱いと改めて感じた。今後も、評価方法としてエッセイを取り入れ、上記能力を伸ばしていきたい。

（４）集中講義（１日４コマ）において、講義、ディスカッションのみで学生の集中力を維持させるのは困難と感じた。ＣＤあるいはＤＶＤなどの利用が重要であると感じた。　（小幡浩司）

＜多文化コミュニケーションＣ（異文化コミュニケーションＣ）＞

【受講生】19名（中国２名、日本17名）

【期　間】９月24日(火)～９月27日(金)　集中講義

【目　標】

異文化コミュニケーションと異文化理解の関係を理解する。①自文化の特性、②相手の異文化の特性、を理解するとともに、③コミュニケーションに及ぼす文化の影響を、理論と具体的事例を通して考察する。

【教　材】プリント

【方　法】

（１）授業内容

授業はプリントやＤＶＤ「英国王のスピーチ」を利用した講義、ディスカッションから成る。学習内容は、①エンパシーとシンパシー、②エポケーとアサーティブコミュニケーション、③自己、アイデンティティと文化、④言語・非言語コミュニケーション、⑤コンテキスト、⑥日本文化と日本文明、⑦個人内コミュニケーションと対人コミュニケーション、⑧カルチャーショック、⑨言葉の力。

（２）エッセイ

「自己、アイデンティティと文化」、「コミュニケーションと文化の影響」というテーマで二つのエッセイを作成させた。

（３）成績及び評価

エッセイ60点（30ｘ2＝60点）、出席・授業への参加40点、の合計100点を満点として評価した。

【評価と課題】

（１）予習（reading assignment）をして講義に臨むような授業形態を試みたが、十分に浸透させることができなかったことは反省点であり、この改善が今後の課題である。
（２）ＤＶＤ「英国王のスピーチ」は、異文化コミュニケーションの諸要素（自己と自己形成、個人内・対人コミュニケーション、コミュニケーションの可能性と限界、等）を理解するのに大変効果的であった。また、上記の文化的諸要素について、学生の発言も活発に行われた。
（３）学生のエッセイを通じて、文章力、クリティカルシンキング、そして理屈の展開力が弱いと改めて感じた。今後も、評価方法としてエッセイを取り入れ、上記能力を伸ばしていきたい。

（小幡浩司）

＜応用日本語Ⅰ＞

【受講生】23名（学部生５名、非正規生18名）

【目　標】

日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

【教　材】日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント

【方　法】

導入として、新聞記事の黙読を行い、大意を把握させた。次に、教師が音読した。それから、学生に1文ずつ、順番に音読させた。その後、新しい文法事項や発音の問題点などを解説し、本文の内容質問等を行った。各回１つの記事を読み切り、次回にその内容に対する試験（記述試験）を実施した。試験については実施の次週に採点返却し、模範解答を配布した。

【評価と課題】

・成績評価は、中間試験（筆記による電話応対）、期末試験（筆記）、毎回の復習テストを総合評価して行った。配分は中間試験40％、期末試験40％、復習テスト20％である。
・出席はおおむね良好だった。授業態度も良好だった。
・電話応対や名刺交換の実地練習もしたが、今回も人数が多かったので、一人あたりの練習時間をあまりとることができず、細かい指導ができなかった。
・今回は、従来使用してきた記事の代わりに、日本の企業における座席決定の方法についての記事を使用したが、学生の出身国との違いが見えて、好評であった。　（山中和樹）

＜応用日本語Ⅱ＞

【受講生】22名（正規生６名、非正規生16名）

【目　標】最近の代表的なテレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

【教　材】テレビドラマＤＶＤ「僕の生きる道」全11話（各45分）

【方　法】１コマで１話を学習する。まず、ＤＶＤを見て、ストーリーの概略を把握させる。次に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の感想及び自国との相違に関するレポートを提出させる。レポートは翌週、チェックした上で返却する。

最初の１コマはガイダンスに当てた。ＤＶＤは全11話であるが、１話を１コマで見る。ＤＶＤを見た後、その回のスクリプトを配布する。時間終了まで、スクリプトの解説をするが、どうしても時間が足りない。それで、３話続けて見たあと、３話分のスクリプトの説明の残りを１コマ使って行う。このようにして、スクリプトの説明で４コマ使った。

【評価と課題】

・授業態度、毎回のレポート、期末試験より総合的に評価する。おおむね出席率は良好であった。昨年度は、一部私語の目立つ学生がいたので、私語防止のため、同じ国の学生が前後左右にならないように、あらかじめ座席指定を行った。この結果、私語は防止できた。

・本ドラマは高視聴率を記録した人気ドラマで、学生にも好評であったが、すでに本国で視聴した学生もいて、もっと新しいドラマを希望するとの声もあった。　（山中和樹）

《まとめ》

日本語科目にもそれ以外の科目にも短期プログラム生が混在するクラスがある。

日本語科目のクラスにおいては、次の２つのケースが見受けられた。

①　読解に関しては、非漢字圏の学生は、困難を伴うことがあるが、正規生のマレーシアの学生はあまりハンディを感じさせなかった。一方、ドイツ、ハンブルク大学からの交換留学生は漢字能力も含めて、日本語能力が不十分であり、中級レベルの授業はかなり困難であった。

②　正規学部生の日本語能力はＮ－２レベルの者が主だが、一方、非正規生（交換留学等の短期留学生）は主にＮ－１レベルの中国人学生で、両者の差が大きかった。

例年、学習意欲については、全般的に、正規生より非正規生（交換留学生及び短期プログラム生）の方が上の印象があるが、今年度についても一部のクラスで同様の報告があった。

日本語科目以外では、日本人学生と留学生が混在する多文化コミュニケーション（異文化コミュニケーション）は夏期集中講義にせざるを得ない事情があった。そのため、受講生は、留学生が極端に少なく、ほとんど日本人学生になってしまったのが、残念である。ただ、例年はこのようなことはなく、今年度だけの特殊なケースであると思われる。　（山中和樹）

６．福井大学博士人材キャリア開発支援センター

《前期》

①　留学生向け日本語学習（単位認定無）

・受講者：留学生研究員１名（中国)、日本人研究員２名

・授業時間：１コマ／週　合計10コマ（４月～６月）

・担当教員：星摩美

１）目標

・博士号（理系）を取得した留学生が就職活動を行う際に必要な日本語力の育成

・日本企業の中で仕事を行う際に必要な日本語力と異文化適応能力の育成

・企業の中で自律的に日本語を学んでいく力の育成

２）教材

主教材『ロールプレイで学ぶビジネス日本語』スリーエーネットワーク

ほか自主作成教材等

３）授業方法

日本企業文化の理解促進と日本語運用力向上のための活動を日本人研究員とともに協働で行い、対話を通して振り返り、修正を行うことができるよう授業を計画した。

企業文化の理解促進では、文化摩擦を起こした事例から、話し合いを行い、自分自身のスタンスを見出していく活動を目指した。

日本語運用力では、ビジネス場面でのＥメールのやり取り、状況に合わせた自己紹介、パワーポイントを使った報告発表などを扱った。

４）評価と課題

ポートフォリオを作成し、目標設定、成果物を収集、評価を行うことを目指したが、受講生に自己評価すること、ポートフォリオ作成の意義を理解してもらうことが不十分に終わり、目標が達成できなかった。

また、一つ一つの活動の中で、参加者が対話することによって、自己の活動を振り返り、学びが起こることを目指したが、協働の活動や対話が不成立に終わることが多く、学びの成果も大きくはなかった。

原因は受講生の学習活動への理解の不足、適正、協働活動する相手とのミスマッチなどが考えられる。今後も受講生によって、協働活動内容の質や成果が大きく異なる可能性は常にあるため、授業参加者に合わせて、どのように授業を計画し、協働作業に積極的に関わる仕掛けを作っていくかが課題である。　（星摩美）

《後期》

①　留学生向け日本語学習（単位認定無）

・受講者：留学生研究員４名（中国２名、韓国１名、バングラデシュ１名)、日本人研究員２名

・授業時間：２コマ／週　合計18コマ（10月～12月）
・担当教員：星摩美
５）目標
・博士号（理系）を取得した留学生が就職活動を行う際に必要な日本語力の育成
・日本企業の中で仕事を行う際に必要な日本語力と異文化適応能力の育成
・企業の中で自律的に日本語を学んでいく力の育成
６）教材
主教材『ロールプレイで学ぶビジネス日本語』スリーエーネットワーク
ほか自主作成教材等
７）授業方法
日本企業文化の理解促進と日本語運用力向上のための活動を日本人研究員とともに協働で行い、対話を通して振り返り、修正を行うことができるよう授業を計画した。
企業文化の理解促進では、文化摩擦を起こした事例から、話し合いを行い、自分自身のスタンスを見出していく活動を行った。
日本語運用力では、ビジネス場面でのＥメールのやり取り、電話での会話、状況に合わせた自己紹介、パワーポイントを使った報告発表などを扱った。
８）評価と課題
今回の受講生は積極的に協働の活動に参加し、成果を残すことができた。
ポートフォリオを作成し、目標設定、成果物を収集、評価を行った。一つ一つの活動の中で、参加者が話し合い、評価し合いながら、活動を行ったが、ポートフォリオの中に他者の評価を含めることができなかった。また、企業でのインターシップ開始が優先されるため、後半になると欠席が多くなり、最終的な振り返りを行うことができなかった。自律的な力を伸ばしていくための、新たな方策が必要である。
今回の受講生のうち１名は初級を学習していなかったため、全学向け日本語コースと協働し、受け入れを可能になるよう図った。今回は出席率に問題があり、成果は得られなかったが、今後初級レベルの受講生には有効な方法であると思われる。
また、受講生のレベルによって、インプットしなければならない内容にばらつきがある。それに対する対応策が必要である。（星摩美）